

第3章

学習に関する意識・実態と 学習到達度の関連

－「学習に関する意識・実態調査」と
「学習到達度に関する調査」のクロス分析より－



分析にあたって

1. 「学力」の意味について

今回の分析では、「学習到達度に関する調査」の結果を「学力」とみなし、「学習に関する意識・実態調査」の結果とクロスさせて分析している。第2章で詳述したが、今回の調査が、現行の学習指導要領に示されている前学年までの目標が達成されているかどうかを客観的に把握するとともに、幅広い資質・能力が測定できる内容であると考えためである。

しかし、測定する資質・能力は、筆記形式で短時間に行う1回限りのテストの範囲にならざるを得ないという制約があり、ある程度は限られた範囲の「学力」を測定していることは間違いない。また、実施教科も算数と国語の2教科にとどまる。この点に留意して、調査結果をみる必要があると考える。

今後、さまざまなタイプの問題開発や経年での実施などによって、より包括的な「学力」の把握が必要だが、今回は1つの試みとして調査実施、分析を行った。

2. 「学力」の階層化

本章の分析のために、テストによって測定した得点を以下の手続きにより階層化した。

- (1) 算数、国語の得点を偏差値に換算する。
- (2) 偏差値60以上を「上位」、50以上60未満を「中の上位」、40以上50未満を「中の下位」、40未満を「下位」として、それぞれの教科の学力階層を出す。
- (3) 算数と国語の合計の得点を偏差値に換算する。
- (4) 教科の学力階層と同様に、偏差値60以上を「上位」、50以上60未満を「中の上位」、40以上50未満を「中の下位」、40未満を「下位」として、2教科合計の学力階層を出す。

この結果、各教科および2教科合計の学力階層の人数、比率は、**表3-1-1**のようになった。